

食べる風景



中山とし子

最近のテレビ番組はよく知らないが、数年前までは、テレビをつけると、大抵誰かが大げさに食べており、食べ物が画面からはみ出さんばかりに溢れていたように記憶する。大食い競争や、食紀行や、街のおいしいもの屋の発掘といった類だが、その時の食べる所作を見ていられない。チラと見ただけで眉をひそめて切る。切った後も何とも言えない不快感は膨らむばかり。

食べる事は人間の本能だから、最も動物的と言えるだろう。その所作には無意識に本人の地が出る。気になるのは、自分と同年代（六

十台）のご婦人たちの食べ方である。口の開き具合や、咀嚼の仕方、箸運びなど、その人の日常生活がそのまま出て、多くの場合、自己を省みずにはいられない。

それ以上に目を逸らさずにおられないのは、飢えと無縁に育った若者が、食物を贅沢に食べ散らし限度以上に口に詰めこんで、己の見苦しさにも気付かぬ姿を見た時である。私は胸の裡で「今にバチが当たるぞ！」と、昔祖母に言われていた言葉を毒づきながら、反射的に、内容は貧弱であったが、最後までおいしく食べきった昭和の中ごろを懐かしく思い出すのである。

私の食卓の風景には、三度の大きな場面の転換がある。

最初は、生まれ育った入来町副田の家。二度目は、二十歳台初めの頃の禅修業の場。

三度目は、嫁ぎ先の食卓である。

最初の、生まれ育った入来の農村地帯にあった実家では、小学生の頃、食事中に話すことは禁じられていた。座卓に家族五人が正座して、

「いただきます」

の号令の後、もくもくと箸を動かす姿が、結婚するまでは普通の家庭の在りかただと思っていた。もちろん年頃になると、肘を突き合わせた妹との小競り合いで、ついおしゃべりやクスクス笑いが始まる。すると母が

「行儀が悪い」

と注意する。喋ると「食卓に唾がとぶ」とか、「食べ物への感謝が足りない」とかいうわけである。あのころは米一粒への感謝が食べる基本にあった。おきまりの「米を粗末にすると目がつぶれる」という「迷信」も健在で、幼いころは結構効き目があった。

私の周りの家庭がほぼこのようだったかと問われれば、今になると自信はないが、正月やお盆に親戚にお呼ばれに行くと、並べられたお膳の前に正座して、もくもくと食べた覚えがあるので、少なくとも私の親戚関係ではそうだったと思う。

因みに、隣家の夫婦は、母の兄と父の妹が結婚した夫婦であった。我家とは血の濃い親戚である。これほどの濃い関係であっても、この地では、他家を訪問したら時候の挨拶方々、まず、「おせつきやんそ」（お忙しい事でしょう）と、一旦立ち止まって両足を揃え、両手を太ももの辺りに置いて軽く頭を下げながら挨拶するのが、三十年前までは普通のことであった。対する迎える方は、畳に正座し、両手を畳について頭を下げながら、「こら、おせつきやんそ」（そちらさんもその通りでございましょう）と同じ挨拶を返す。（註）これが



1960年（昭和35年）台の到来の田園と愛宕山（藪牟田山系）

済むと急にくだけて親しい調子になり、普段の会話が始まるといった按配であった。今は亡き義父が、結納のため初めて我が家を訪れ、この「やりとり」を見た時、こう言った。
 「儀式か芝居のようやな」

と。婚家は三重県の小さな海辺に住まいている。隣近所は大方親戚ばかりという、パラダイスのような村である。ともあれ、私が結婚した昭和五十年頃の到来の実家はこのようであり、自分ではこれを奇妙などとは思わなかった。

二度目の場面は、禅堂での食事である。二十歳から曹洞宗の禅寺に通い、禅狂いをしてきた。曹洞禅では、面壁していた体を百八十度返して禅堂の中に向き直り、跏坐（足を組んで坐ること。結跏趺坐と半跏趺坐がある）した足の前に什器を据え、様々な決まりごとの中で粛々とした食事風景が展開される。食

事は禅の修業の一つなので、当然無駄な音声などは一切ご法度である。行為これすべて修行であり、精神をそれに集中せよという、只管打座の考え方から来ている。加えて、太陽、水、土を始めとした自然的要因、料理した人、運んだ人、と食事に関わったすべてのものに感謝しながら食べるべしであった。これは幼い頃から実行してきた実家のやり方をより謹厳に行うものであったから、違和感がなかった。むしろ心地良かった。黙って食べれば食べることに集中し、素材の味もよくわかるし、他の誰彼に気が散ることもない。自然と背筋が伸び、什器はよっぽど大きい皿以外は手に取って胸より上の高さにまで持ち、両肘も持ち上げて顔を俯けずに堂々と前を向いて食べる。この習慣は体が覚えていたので、座禅をやめた結婚後も、長く意識せずともこの姿勢であった。

しかし、禅の一環として禅堂で食事することは普段は少ない。大方は、座禅が終わった後、控え室に移動し、メンバー全員で食べるが多かった。このときも、和やかではあったが、声があちこち行き交うという事はなかった。自分が食べ終わると、全員が食べ終わるまで両手をひざにじっと待ち、全員が食べ終わった後、それぞれたくわんを一切れずつ食器の中に取り、そこに番茶を注いで食器に付いた飯粒などをたくわんで洗って落とし、最後にはその汁を全部飲んで、什器の内側もきれいにして「ごちそうさま」となる。肉魚のない献立であるし、一汁一菜と漬物という粗食であるが、なぜあんなにおいしく、充実を感じたのだろうか。

さて、三度目の食事場面こそ、私にとって意識の変化を迫るものであった。夫の実家は酒飲みの家である。まず大きな座敷机に男た

ちが陣取り、酒を飲み始める。料理は当然酒の肴になりそうなものが主となる。ここは漁場なので、料理はすべて新鮮な海のもの。飲み、喋り、宴会も始まりそうな頃、ようやく、子供や女たちのご飯や汁物が並び、一時も静かな時間がないほどに誰かが、主に義父が、大声で喋るのである。酒を飲む家と飲まない家の違いに戸惑いながら、料理を作り、運び、何度もグラスを洗っては出すの繰り返しの中で、

「食事中は会話を楽しみながら食べるのが正しい。黙って食べるのは体にも悪いし、陰気で家族間の平和にも悪い」

という、そのころから世間で言われ始めた欧米の方式を真似たにぎやかな食事の在りかたを、近代的であり正しい、と思うようになった。

因みにこの家の訪問客の到来の仕方を述

べると、

「いるかな？」

と大声がしたかと思うと、もう玄関にまで上がってきて、次は座敷に勝手に座っている。女性客も「〇〇ちゃんいるかな？」と声がすると、すでに台所にいる。くったくのないというか、内外うちとそとのけじめのない親密さである。

酒を飲まない家であった実家では、隣の親戚が来ても、まずは時候の挨拶をしてからお茶を出すのが礼儀であった。対する婚家では、お茶を出すと「訪問を歓迎しないから帰れ」という意味だそう。で、男性客の訪問があれば、迷わず酒の類を出さなければならぬ。今のように酒飲み運転がうるさくない頃ではあった。

このような婚家の食環境の中、にぎやかに喋りながら食べることに慣れ、食事の時間が子供たちとのコミュニケーションを取る場と

なった。世間の風潮も「食事とは会話を楽し
みながらするのが良い」という考え方に一点
の曇りもなく同調していったように思う。今
もそうであると思う。

しかし最近、私自身は、食事しながら会話
することが苦痛になった。夫婦二人の環境が
会話を必要としないからであろうか。それと
も私が幼いころからこのにぎやかな食事形態
を持たなかったから、老いて子供時代に還る
の類なのであろうか。食べながらの会話に違
和感があるのである。もしかすると、こう思
うようになってからだったのか、人々が無意
識に片肘をつき食器の中のものはいじくる所
作や、「おいしい」を連発しながら大騒ぎして
批評と相槌を繰り返す様子を、寒々しく感じ
るようになったのは。

勿論、黙って食べることを是とした時代か
ら、会話しながら食べることを肯定する時代

への食卓のあり方への変化は、楽しく食べる
ことの発見、人間関係の潤滑油的働きを提供
すること、食欲のまま腹いっぱい食べること
の幸福感を得ることなど、日本人の食事への
堅苦しさを取り除き、料理の発展にも貢献し、
私たち日本人に様々な恩恵をもたらした。が、
一方、何か大切なものを置き忘れたような空
虚感もぬぐえない。

私は、食事はただおいしければ良いという
のではなく、食事の持つもう一つの側面であ
る「他の命を自分の命に取り込むこと」を、
この辺で思い出さなければならぬのではな
いかと考える。頂くことに対する感謝は、自
然と食べる行為へと集中させ、素材をじつ々
りと味わい、食物を残さない態度へと向かう
はずだ。『炉ばたセイ談』八号で宮下亮善師が
述べておられたように、「テレビを食卓から除
く」事は、一つの方法であり、食事の時間だ

けでも、計り知れないほどの効果が期待できるように思う。ただ外見的な形だけを言っているのではなく、食べる行為が欲求を満たすためだけのものではないことを思い出したい。少なくとも「食べる」ということにもう少し慎ましやかになりたいものである。「食べる」と「出すこと」は、人間が最後まで残す生理的欲求であるからこそ、「食べる」そのときはなるべく品良くありたいと思う。

昨今、一部の人々に再評価され始めている「躰」。一時、子どもたちを縛る悪の権化のように言われた「躰」は、人間が人間らしくあるためにはむしろ必要なものである、と心ある一部の人々には再認識され始めている。まずは、家庭の食事場面に生かされることを願う。

(エッセイスト)



入院夫妻と著者 平成13年(2001年)2月

(註)二〇一四年六月、故郷の同級生と会う機会があった。玄関口では、お互いワイワイガヤガヤと賑やかに喋りしていたが、座敷に入った途端に、さっと正座して両手をつき、「こら、お疲れ様でした。ゆくさ帰ってきやした」と正式な挨拶をしたのには、恐れ入ると同時に感動した。自分の気高いルーツを見る思いだった。